―第 35 号―

地域・だいがく連携通信
―神戸大学地域連携ニュース―

神戸大学地域連携推進本部
〒 657-8501
神戸市灘区六甲台町 1-1
TEL ：078-803-5391
FAX：078-803-5389
E-mail：ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

姫路市と包括連携協定、11自治体目に
本学と連携し臨床研究推進センターを設置

神戸大学は３月17日、姫路市と包括的な連携協定を結び、同市役所で締結式と記者会見を開きました。本学の全学的な連携協定は、姫路市が加わったことで11自治体・地区（兵庫県内10自治体・地区）となりました。

本学は2022年度から、同市の大学発まちづくり事業補助金を受け、大学院国際文化学研究科が2023年４月に地域社会の国際化をテーマに連携協定を締結しています。2025年度から５年間、大学院医学研究科に姫路市からの寄附講座を設置するのを機に、組織間で連携を強化するため包括連携協定締結の運びとなりました。地域振興、科学技術、産業振興、教育の推進、人材育成、地域保健医療など多くの分野で連携・協力し地域に貢献します。

締結式には、神戸大学から藤澤正人学長、奥村弘理事・副学長、眞庭謙昌医学部附属病院長・副学長、姫路市から清元秀泰市長、加藤聡総合教育監らが出席しました。藤澤学長と清元市長が挨拶に立ち、これまでの交流の経緯や今後の取り組みについて紹介し、協定書にサインをしました。

署名した協定書を示す
藤澤正人学長（左）と清元秀泰姫路市長（右）

神戸大学と姫路市の包括連携協定締結式と記者会見の様子

藤澤学長は姫路市に隣接する神崎郡市川町出身で自身のエピソードを披露しながら、本学の現状やこれまで行われた同市との連携に触れ、「今回の協定により窓口が一元化され、各分野の連携を集約するとともに、新たな連携が次々に生まれることを期待します。今後、相互の強みを生かした、行政と大学のパートナーシップが形成されることを確信しています」と意気込みを語りました。

姫路市では、これまで市内６大学と包括連携協定を結び、神戸大学は７つ目の包括連携協定となります。挨拶に立った清元市長も「豊かな学識を備えた人材を有する神戸大学との連携は心強く、意義深いものです。連携協定の締結により、地域振興や科学技術、地域保健医療などの分野において、さまざまなご提言をいただき、実効性の高い連携事業が数多く実施できるものと期待しています」と話しました。

その後、神戸大学医学部附属病院の眞庭謙昌病院長より、2025年度から姫路市で展開される医療分野の連携事業についての説明がありました。両者が連携し、兵庫県立はりま姫路総合医療センター内に「はりま姫路地域臨床研究推進センター」（仮称）を設置し、同医療機関を実習の場として臨床研究支援人材を養成する事業が報告されました。同地域での活躍を目指す看護師、検査技師、薬剤師などの医療従事者を対象に、年間10人程度の養成を目指します。清元市長も、同研究推進センターへの期待を口にしました。

（地域連携推進本部・連携推進課・広報課）

神戸大学阪神・淡路大震災30年シンポジウムを開催しました（第1部）

神戸大学は1月11日、阪神・淡路大震災から30年の経験や教訓、研究成果を発信する「阪神・淡路大震災30年シンポジウム」を、神戸大学百年記念館六甲ホール（神戸市灘区）で開催しました。本学の復興の歩みを振り返るとともに、幅広い分野の研究者が震災以後の研究の進化や課題について議論しました。1月17日の震災30年の節目を前に、市民の関心も高く、会場とオンラインを合わせて約250人が参加しました。

開会のあいさつをする藤澤正人・神戸大学長
（写真はいずれも神戸大学百年記念館六甲ホール）

シンポジウムは、神戸大学阪神・淡路大震災30年事業委員会、都市安全研究センター、地域連携推進本部が主催し、国立大学協会レジリエント社会・地域共創シンポジウムの一環として実施。午前の第１部ではまず、藤澤正人学長が開会のあいさつに立ち、医師として震災直後から手術や医療活動に奔走した経験などを振り返りつつ、全国からの支援にあらためて感謝の意を示しました。そのうえで、学生・教職員合わせて47人（旧神戸商船大学を含む）を失った被災地の大学の責務として、今後も安全・安心な社会の構築に向けた研究、教育を進めていく決意を述べました。基調講演を行った奥村弘理事・副学長は、「境界をこえて－実践的研究と教育の展開」と題し、本学の30年の歩みとその特徴を語りました。被災地の中心部にある国立大学として、市民とともに復旧・復興に向き合ってきた道のりに触れ、「多様かつ総合的な分野で社会からの対応を求められ、それに実直にこたえようとしてきた。阪神・淡路大震災は日本で初めて、全国の研究者が結集して防災・減災の総合的、実践的研究を進めた災害であり、本学も既存の学問領域を越えて総合的な知の形成と継承に取り組んできた」と述べました。そして、その流れが、災害という領域にとどまらず、さまざまな社会課題の解決を目指す研究・実践に発展した点を強調し、本学が研究基盤を支える資料の体系的蓄積にも力を入れてきたことを紹介しました。

第１部には、２人の卒業生も登壇し、奥村理事と鼎談を行いました。

阪神・淡路大震災当時の経験などを語った（右から）卒業生の安田真奈さん、住田功一さんと、奥村弘理事・副学長

元NHKアナウンサーとして震災報道に携わってきた住田功一・大阪芸術大学教授は、震災直後から神戸市内での取材を始め、避難所となった神戸大学のキャンパスにも入りました。当時の大学の様子、火災で学生が犠牲になったアパート跡などの写真を紹介しながら、「なぜこれほど多くの学生が亡くなったのか、という思いが自分の30年の原点にある。一人一人の死に向き合い考えていくこと、語り継ぎ、語りなおすことの大切さを、今あらためて感じている」と語りました。震災の2年前に卒業し、大阪の企業に勤務していた映画監督・脚本家の安田真奈さんは、当時経営学部３年生だった映画サークルの後輩を亡くしました。震災の2か月後、後輩が制作した作品の追悼上映会が神戸大学で開かれた際の状況などを振り返り、「神戸に来ると、大阪とは異なる重い現実があり、心の置きどころが難しかった」と体験を語りました。また、2018年の大阪府北部地震の経験などに触れて、防災の知恵を伝え続ける重要性を強調し、「テレビで繰り返し放映されるような目立つ被害だけでなく、身近な生活の中で起きた被害や教訓を伝えることも大切。だれもが取り組みやすい形で防災を考える社会になってほしい」と話しました。

震災以降継続している神戸大学の災害ボランティア、多様な社会貢献についての発表もありました。地域連携推進本部ボランティア支援部門長の山地久美子特命准教授と４つの学生団体が、能登半島地震の被災地支援をはじめさまざまな活動を報告。阪神・淡路大震災直後に発足し、30年間活動を続けている「神戸大学学生震災救援隊」のメンバーは「先輩からの思いを受け継ぎ、継続的にまちと人にかかわることを大切にしている」と話しました。

（地域連携推進本部・都市安全研究センター・総務部広報課）

灘区広報啓発チーム「マリーゴールド・エンジェルス」特殊詐欺防止キャンペーンを実施

神戸大学アメリカンフットボール部RAVENSチアリーダーです。当部は、2024年12月13日に地域活性化活動の一環として、特殊詐欺防止を呼び掛ける安全啓発活動に取り組みました。この活動は、私たちRAVENSチアリーダーが「地域に貢献できる活動をしたい」という思いを持ち続けてきた中で、灘区地域協働課の方々のご協力を得て実現したものです。

当日は、地域の方々と直接コミュニケーションを取りながら、防犯意識を高める手助けができるよう努めました。チアリーダーとして、ただ試合を応援するだけでなく、笑顔と元気を届ける存在でありたいと考えており、今回の活動を通じて、地域の方々との交流の大切さを改めて実感しました。私たちは、灘区の皆さまに留まらず、神戸市全体に笑顔を広げていけるような団体を目指します。

また、2025年には神戸大学アメフト部RAVENSが創部50周年を迎えます。これを機に、ボランティア活動を通じて地域とのつながりを深め、より多くの方々にRAVENSのことを知っていただきたいと考えています。今後も試合応援や練習に励みながら、地域に元気を届ける活動にも積極的に取り組んでまいります。

（神戸大学アメリカンフットボール部専属チアリーダー　部長　大内美実）

令和6年度 ひょうご神戸プラットォーム連絡会の開催

2025年3月11日に令和6年度「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム連絡会」を開催しました。本会は、本学が申請校として採択された文部科学省COC＋事業（H27～31年度）を契機として組織された連絡会であり、地域の経済界、自治体、大学が一体となって活動していくための意見交換の場です。参加した各大学が地域連携活動について報告し、経済界・自治体・大学で意見交換を行い、あらゆる視点から地域連携を考え、今後の活動の一助とするものです。今回は、対面・zoomによるハイブリッド開催で30名を超える参加者がありました。冒頭の奥村弘地域連携推進本部長による挨拶のあと、神戸大学・兵庫県立大学・園田学園女子大学から報告を行いました。

本学からは、田中丸治哉アドバイザイリフェローより地域連携推進本部の体制や、今年度の自治体との連携協定、大学都市神戸産官学プラットフォーム・採択プロジェクト「企業・行政・大学・住民が共につくる地域防災」の地域防災セミナー、阪神・淡路大震災30年シンポといった今年度の本部の活動について紹介しました。教員の地域連携・研究活動として長志珠絵・国際文化学研究科教授による「神戸の戦後生活史をめぐる映像資料を読む・見る・語る」と題した報告と、学生団体の地域活動として神戸大学<TEAM NADA>代表学生による「『灘・夢ナリエ2024』ワークショップ活動」の報告がありました。本学の教職員・学生の地域活動の詳細については地域連携推進本部のウェブサイトと活動報告書をご覧ください。

兵庫県立大学の柴崎浩平・環境人間学部助教より、「ため池みらいプロジェクト」での地域づくり・組織づくりを中心に報告がありました。園田学園女子大学の大江篤学長からは、地域連携を重視した「経験値教育」や、「ひょうご絆プロジェクト」として香美町における「地域の記録作成・発信、体験コンテンツの企画」についての報告がありました。

各報告に対して活発な質疑応答がなされ、COC+参画機関の代表者からは、地元就職や定着につなげるため、自治体や企業と大学との一層の連携活動の展開と本プラットフォームへの期待が述べられました。

最後に大江篤・園田学園女子大学学長より、県内で少子高齢化や過疎化に悩む地域が増えつつある中、「外の目」という媒介者と地元とのつながりを維持することの大切さの指摘がありました。また大学に求められる機能として、地域連携に関するコーディネートが可能な教員や職員を育て、地域創生ができる専門知の創出と人材育成、大学と地域とをマッチングさせるため、本会のような教職員・学生、自治体、市民の交流の場づくりの必要性を強調され、本会は終了しました。

（地域連携推進本部）

2024年度 保健学研究科地域連携センター 報告会

保健学研究科地域連携センターは、【少子高齢社会に適応した街づくり】をテーマに、研究科の構成員が培ってきた専門的知識を活かして、乳幼児を持つ家族、高齢者そして障害を持つ人々が安心して暮らせるよう、多世代にわたる地域住民をシームレスに支援するために、保健学研究科と地域をつなぐ窓口の役割を担っています。現在、神戸市など兵庫県下の自治体やNPO等と連携して、複数の事業を実施しています。

2025年2月15日にKOBE Co CREATION CENTERにて、保健学研究科地域連携センター報告会を開催し、25名のご参加をいただきました。本年度は、事業報告に加え、当センターの初代センター長であり、現在は神戸市総合療育センター診療所長である高田哲先生をお招きして地域連携センターとの協働についてご講演をいただきました。

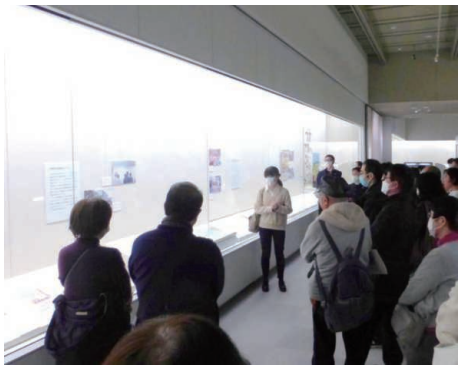
講演では、センター設立の経緯から、母子への支援事業をどのように活動を拡大されたかについてお話いただきました。また、人口減少および超少子高齢社会という社会の変化に伴い自治体から大学に対して、豊富な人的資源や新しい知識・アイデアの提供、異なった学問領域の交流により新しいニーズの発見などの期待をお示しいただきました。

事業報告では、当センターが実施している６つの事業の報告を学生も交えて行い、各活動に多くの地域住民や周辺施設の方や学生ボランティアが参加してくださっている様子が伺えました。

（保健学研究科地域連携センター）

兵庫県立歴史博物館の阪神･淡路大震災30年特別展への協力

授業の様子（文学部）



学生による展示解説（兵庫県立歴史博物館）

阪神・淡路大震災30年にあたり、兵庫県立歴史博物館で開催された特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる」（2025年1月11日～3月16日）の企画・制作に協力しました。文学部・人文学研究科の学生10名と同研究科教員吉川圭太講師が、日本現代史ゼミの一環として半年間にわたり調査と議論を重ね、同館学芸員と展示準備を進めました。展示の一部は、学生がそれぞれの視点で資料を選定し、解説文を執筆したものになります。2月22日には一般観覧者に対して学生らが展示解説を行いました。大学と博物館との連携を通して研究教育の成果を発信する試みであり、震災非当事者である学生たちが震災にいかに向き合い、どう伝えるかを考える機会となりました。

（人文学研究科地域連携センター）

海事科学研究科「こどもいろいろ体験スクール」と夏休みワークショップ「タオルアニマルを作ろう」を開催

神戸大学海事科学研究科地域連携センターは、毎夏、地域と連携したイベントを実施し、海洋人材の育成や海洋文化の普及に取り組んでいます。2024年度も、小学生から中学生を対象とした「こどもいろいろ体験スクール」、海事博物館のワークショップを開催しました。

7月31日に開催された「こどもいろいろ体験スクール」には、小学3年生から中学1年生までの24名が参加し、保護者を含め約40名が海の世界を体感しました。練習船「海神丸」の見学では、船の多様な機能を学び、実習船「白鴎」に乗船して神戸の街並みを海から楽しみました。また、海事博物館では船の歴史や海技士の仕事について学び、元「深江丸」船長の矢野吉治氏（本学名誉教授）が航海の経験をお話し下さいました。参加者は熱心に聞き入り、海事への興味を深める様子が印象的でした。

7月29日と8月2日には、海事博物館で夏休みワークショップ「タオルアニマルを作ろう」を開催。本イベントは、日本の旅客船のおもてなし「花毛布」に着想を得たもので、タオルアニマル作りを通じて相手を思いやる心を学ぶ機会となりました。明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部の上杉恵美教授が、クルーズ船やホテルでのタオルアニマルの歴史を紹介され、ペンギンやカニ、スワンハートなどの作り方を実演。子どもたちは夢中になってタオルを折り、可愛らしい動物たちを次々に完成させました。最後には、二羽の白鳥が向かい合うハート形を作り、会場は温かい雰囲気に包まれました。

これらのイベントは、地域の子どもたちに新たな学びを提供するとともに、本学と地域社会のつながりを深める貴重な機会となりました。今後も、本センターではさまざまな活動を通じて、地域と連携した教育の場を提供していきます。

（海事科学研究科地域連携センター）

経済経営研究所　ESG地域金融の普及に取り組む

経済経営研究所地域共創研究推進センターでは、兵庫県を中心に据えて地域社会の課題解決を進めていくために、兵庫県庁をはじめとして、地域企業、地域金融機関、地域支援団体などと共同研究や受託研究を行っています。たとえば、尼崎信用金庫とは、2022年から「ESG要素を考慮した事業性評価の深化を通じた地域における事業者支援体制構築の推進」に関する共同研究を実施しています。

共同研究の成果の
神戸大学出版会からの出版

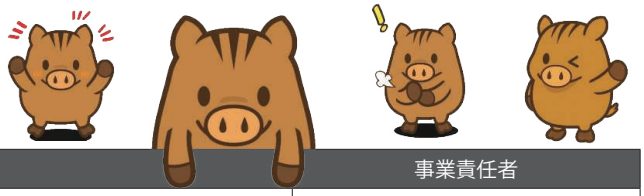
シンポジウムで開会の挨拶をされる
作田誠司尼崎信用金庫理事長

2024年5月に実施したシンポジウム「ESG地域金融がつくる中小企業の輝く社会」では、出光佐三六甲台講堂に129名の方が直接来場され、ウェビナーで参加された方と合わせると約400名の企業・組織と個人の方に参加していただきました。また、その模様は、神戸新聞やサンテレビといった地元のメディアで取り上げられ、センターの目的である中小企業支援における地域のハブ機能を果たしています。

（経済経営研究所地域共創研究推進センター）

R6年度地域連携公募事業

地域連携事業（個人型）

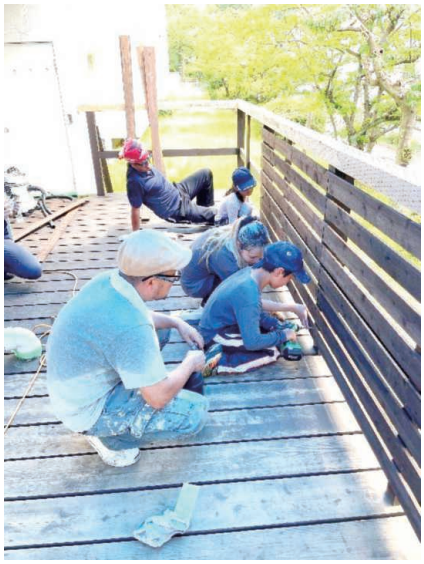


部局名	活動内容	事業責任者
農学研究科	山田錦の米ぬかを用いた新規化粧品の開発(継続課題)	農学研究科　教授　宇野　知秀
経営学研究科	移動・人流・オープンデータに基づくグリーンイノベーションの解析およびコミュニティ実装実験	経営学研究料　准教授　原　泰史
保健学研究科	地域の健康を支える人材育成によるウェルビーイング向上事業	保健学研究科 特命准教授　園田　悠馬
農学研究科	デジタルトランスフォーメーション(DX) による天然記念物の見える化	農学研究科　教授　石井　弘明
工学研究科	鶴甲団地 再生・活用プロジェクト	工学研究科　准教授　栗山　尚子
国際文化学研究科	神戸の戦後生活史をめぐる映像資料を読む・見る・語る ー戦災史資料の蓄積を新たに読み直すパブリック・ヒストリーの試み	国際文化学研究科 教授　長　志珠絵
人文学研究科	多文化の背景を持つ子ども・若者の育ち・学び・未来に関する実証的研究	人文学研究科　教授　平井　晶子
科学技術イノベーション研究科	医療過疎化に向かう地域での医療資源の有効活用と 住民健康管理におけるイノベーション創出 ～アカデミアンによる新たな地域連携活性化支援モデルの探索～	科学技術イノベーション研究科 先端医療学分野 教授　山下　智也
農学研究科	丹波篠山市と連携した有機丹波篠山黒枝豆の 適切な販売チャネルの構築に係るプロジェクト	農学研究科　准教授　八木　浩平
経営学研究科	六甲山上の地域学校協働活動を通じた、 領域横断型の環境教育プログラムの開発および実施	経営学研究科　教授　松嶋　登
経営学研究科	平野プロジェクト2024： ユーザー中心の課題解決によるまちづくり・商店街活性化	経営学研究科　教授　内田　浩史

事業例：鶴甲団地 再生・活用プロジェクト

令和６年度「地域連携事業（個人型）」の助成を受け、鶴甲団地の空き住戸のリニューアルのDIY活動を行ないました。団地再生に関するこのプロジェクトは、神戸住環境整備公社と本学工学研究科の協定に基づく活動で、約10年継続してきました。

今年度は鶴甲団地が対象です。公社が所有・管理する鶴甲コーポ15号館1階の2戸連続住戸が本学の留学生向けのルームシェア住戸として使われてきましたが、昨年度に役割を終えました。昨年度中に、本学工学研究科建築学専攻栗山研究室の学生がリニューアルプランの提案を行ないました。そして、今年度はそのプランが一部反映され、多世代居住をコンセプトにした4LDK+Kの間取りをもつ賃貸住宅として生まれ変わることになりました。



2024年7-8月下旬にかけて、本学学生、公社職員、近隣の住民の方々がDIYに取り組みました。DIYは6回実施され、そのうち2回に近隣住民の方が参加されました。猛暑であったため、熱中症対策をしっかり行ない、小上がりの組み立て・天井の設置、ウッドデッキルーバーの設置、ペイントといったDIY活動を行ないました。

出来上がった住戸は、2024年10月12日、13日に開催された公社主催のオープンルームイベントで公開されました。多くの皆さんが来場され、今後も鶴甲エリアに住み続ける上でのリフォームの参考になる等の意見をいただき、団地に住み続けるという関心の向上に寄与できたと感じています。

団地は、駅から遠いという立地、古い設備や陳腐化した間取りといった理由から、空き住戸が増えやすいという課題がありますが、リニューアルによって、断熱性の向上や、間取りの変更等が可能で、お得な家賃で広めの住戸に居住できます。今後も、公社と連携しながら、団地再生に関する活動に取り組んでいきたいと考えています。

（工学研究科　准教授　栗山尚子）

R6年度学生地域アクションプラン（学生対象）

団体名	活動内容	代表学生	事業責任者
神戸大学 保全生態学研究会	行政と連携した天然記念物に関する 調査・啓蒙活動	農学研究科・博士前期課程2年 高橋　あかり	農学研究科 教授　石井　弘明
神戸大学 学生震災救援隊	「耐震構造の人間関係」形成に向けて 学生の地域参加を進める事業	法学部3年 鈴木　蒼生	経済学研究科 教授　梶谷　懐
地域交流機会創出の会 「なごぶい」	ＵＲグリーンヒルズ六甲における 社会的交流促進活動	国際人間科学部4年 中野　篤史	ウェルビーイング先端研究センター (兼任)人間発達環境学研究科 教授　片桐　恵子
児童文化研究会	健やか子どもの笑顔事業　in豊岡	国際人間科学部3年 平野　寛大	経営学研究科 教授　三品　和広
神戸大学 <TEAMNADA>	「灘・夢ナリエ2024」 ワークショップ活動	工学研究科・修士1年 泉　貴広	工学研究科 教授　槻橋　修
K&MBERRIES	夏イチゴのマルシェ・トライアル	農学部３年 似内　瑞季	農学研究科 教授　宇野　雄一

事業例：「灘・夢ナリエ2024」ワークショップ活動

2024年9月21日（土）に六甲道南公園で開催された「灘夢ナリエ」に、神戸大学建築学科槻橋・浅井研究室と株式会社戎工務店の連携チーム<TEAMNADA>として参加しました。

今年度は子どもブース出展による夜に灯す行燈製作ワークショップだけでなく、お祭り空間全体をプロデュースする立場としても参加させていただきました。

かねてより住民の方から要望があった盆踊りの中心を、木材フレームを用いた櫓を設計、製作しました。日中は4色で彩られた櫓が目を引く存在となり、夜にはワークショップでつくられた灯りで飾られるお祭りを象徴する存在となり、大いに盛り上がりました。

櫓製作の工場の提供や工具、材料の発注、当日の運搬撤去には戎工務店さんにご協力いただき、公園の広さや斜面の測量、櫓及び土台の設計、製作作業はすべて学生で執り行いました。灘区を中心に活動されている企業の方々と協力し、神戸大学が位置する灘区に暮らす人々のにぎわいに貢献することができました。

（工学研究科　修士1年　泉 貴広）

KOBEゼロカーボン支援補助金募集（神戸市環境局環境創造課）

研究代表者	研究課題名
経営学研究科 教授 松嶋 登	一般：環境教育プログラム「山の子エコロゴス」の実施を通じた、脱炭素社会を実現する環境意識の向上と、六甲山上の地域課題を解決するコミュニティーの活性化
理学研究科 准教授 津田 明彦	チャレンジ：バイオガスを原料とする光オン・デマンド化学品合成による温室効果ガス削減への取り組み

大学発アーバンイノベーション神戸（神戸市企画調整局産学連携推進課）

研究代表者	研究課題名
人間発達環境学研究科 教授 増本 康平	ウェルビーイングの実現に資する社会的つながりの新たな推定・評価方法の確立
産官学連携本部 非常勤講師 山川 義徳	農脳連携を通じた都市農村交流の促進
経済経営研究所 助教 明坂 弥香	大都市における最低賃金の引き上げが周辺地域に与える影響の分析
都市安全研究センター 教授 近藤 民代	コロナ住居喪失危機を契機としたハイブリッド型住宅セイフティネットの構築
国際人間科学部 助教 佐々木 一惠	神戸市長田の継承語・継承文化の保存と教育への活用を目指した総合的研究
農学研究科 助教 上田 修司	神戸ビーフの美味しい香りの生成過程の解明とその関連遺伝子の探索
農学研究科 助教 吉田 弦	耕畜食地域連携を指向した肉牛ふん尿の新規資源循環プロセスの開発
工学研究科 准教授 西田 勇	医療機器開発促進に向けたカスタマイズ部品加工の自動化システム
経済学研究科 准教授 山岡 淳	産前産後期間の女性の健康行動に関する実践的調査研究
人間発達環境学研究科 准教授 大野 朋子	バイオフィリック・デザインによる都市緑地の展開－多様な街路樹を生かしたLiving Nature Kobeを目指して－
保健学研究科 助教 正垣 淳子	市民と医療者の協働による実用的な心不全症状マネジメントの開発
計算社会科学研究センター 特命助教 ROMIC IVAN	神戸市ふるさと納税制度のゲーム理論
医学部 講師 原 琢人	遠隔ロボット支援手術の通信遅延に対する手術手技絵の影響とトレーニング手法の探索
国際文化学研究科 講師 衣笠 太郎	神戸市域におけるキリスト教関係史料の整理と観光活用
人文学研究科 特命講師 井上 舞	北区を中心とした神戸市域における地域所在資料の保全と活用

大学と連携した地域課題の調査研究業務（神戸市企画調整局政策課）

研究代表者	研究課題名
工学研究科 教授 織田澤 利守	世代循環型まちづくりに向けた理論及び調査研究
経済学研究科 准教授 山岡 淳	大規模マンション建設に伴う地域経済社会への影響と社会課題
ウェルビーイング先端研究センター 教授 片桐 恵子	「坂の街神戸」と地域住民のWell-being：坂に息づくコミュニティの構築
人文学研究科 教授 平井 晶子	「多文化の背景を持つ子供・若者」とともに生きる社会をめざして：子育て・教育・進路に関する調査研究

姫路市大学発まちづくり研究助成事業（姫路市政策局高等教育室）

研究代表者	研究課題名
農学研究科 教授 石井 弘明	スギ人工林の再造林・広葉樹林化に関する研究
医学研究科 特命准教授 姉崎 久敬	HEARTSデータ等を用いた播磨姫路圏域における救急医療の実態把握

灘区大学と連携したまちづくりチャレンジ事業補助金（灘区地域協働課）

団体名	事業内容	事業責任者
灘地域活動センター（N.A.C.）	灘区内の災害復興住宅の集会所におけるふれあい喫茶の運営、戸別訪問活動	共同代表 佐伯 海斗・荒畑 由芽
障がいのある青年の生涯学習支援会（ふぉーえす）	女子会＋	代表 廣兼 響子
まちプロジェクト実行委員会	まちプロジェクト'24	代表 神前 由佳
神戸大学天文研究会	なだ星まつり	会長 羽原 千就
神戸大学大学院人間発達環境学研究科	鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト	アクティブエイジング研究センター長 長ヶ原 誠

神戸市「地域貢献賞」を受賞 神戸大学灘地域活動センター（N.A.C.）

神戸大学生のボランティア団体・灘地域活動センター（N.A.C.）が「地域貢献賞」を受賞しました。神戸市が地域課題の解決に取り組む地域活動の功績を称える賞で、第１回表彰の栄誉を戴きました。
N.A.C.は阪神・淡路大震災（1995年）後から被災された方との交流を続けていて、今も2カ所の集合住宅（HAT神戸灘の浜・県営岩屋北町住宅）でなぎさふれあいのまちづくり協議会、岩屋北町住宅自治会の皆さまと「ふれあい喫茶」を開催しています。
授賞した共同代表の佐伯海斗さん・荒畑由芽さんは「先輩たちが代々継続し、自分たちが受け継いできた活動が表彰されてうれしい」とメンバー全員の喜びの気持ちを表していました。

2025年3月25日
神戸市役所14階大会議室
山品俊介さん・佐伯海斗さん

ボランティア・地域連携　神戸大学×学生×地域×企業×行政

ALL HAT 2024 第9回HAT神戸防災訓練　2024年10月26日 人と防災未来センター・なぎさ公園

「ALL HAT」はHAT神戸のまちづくり協議会や関係機関が連携し、安全・安心なまちづくり、コミュニティの醸成、防災意識の向上を図るために始まった防災訓練です。今回初めて、長田区の日吉町5丁目町内会、JA共済連兵庫、神戸市危機管理室、神戸学院大学、神戸大学地域連携推進本部、N.A.C.が炊き出し協力や避難食、帰宅困難者支援、ぼうさい川柳の募集ブースを出展し、相互に交流を図りました。

脇浜ふれあいのまちづくり協議会
なぎさふれあいのまちづくり協議会
神戸大学灘地域活動センター（N.A.C.）
日吉町5丁目町内会
JA共済連兵庫
神戸市危機管理室
神戸学院大学
地域連携推進本部

JA共済連兵庫／ラジオ関西 阪神・淡路大震災30年メモリアル企画「ぼうさいげんさい川柳」への協力

阪神・淡路大震災から30年を迎えるに際し、 JA共済連兵庫・ラジオ関西が防災・減災に資する地域貢献に向けて、取り組まれた「ぼうさいげんさい川柳」の募集、ALL HAT2024防災訓練の出展、そして、阪神・淡路大震災で被災された方と地域の方たちとの防災訓練、川柳教室と秋巡業「大相撲姫路場所」への招待事業に協力者や神戸大学生、教職員が共に、ボランティアで取り組みました。

ALLHAT2024・N.A.C.

まちづくり協議会・川柳教室

神戸大学ボランティア
バスプロジェクト

つながりから広がる、地域防災の未来セミナー

大学都市神戸産官学プラットフォーム採択プロジェクト
「企業、行政、大学、住民が共につくる地域防災」

第2回 2024年12月15
「阪神・淡路大震災から30年 次に私たちができること」

神戸学院大学、兵庫県立大学、神戸大学が、50名の参加者とセミナー、ロゲイニング「ちずあそび」に取り組みました。

第3回 2025年2月26日
「みんなの避難の場～多様性と包摂性を考える」

神戸大学、神戸市看護大学、神戸松陰女子学院大学が、大和リース㈱、神戸市、中央区役所の協力を受け60名の参加者と避難所の設営実践や運営について議論しました。

「阪神・淡路大震災30年シンポジウム」2025年1月11日

学生団体による合唱・神戸大学生のボランティア 30年のリレー

神戸大学百年記念館六甲ホール

阪神・淡路大震災から30年。神戸大学生は30年前の1月17日直後から、被災された方々への支援活動を始め、今も災害ボランティアに取り組んでいます。

シンポジウムは1948年設立の混声合唱団アポロンと1985年頃から活動する手話サークル ぺんぺん草の「しあわせ運べるように」の合唱から始まりました。「神戸大学生のボランティア 30年のリレー」では、ボランティア４団体の代表らが活動を報告するとともに、昨年1月27日に開催した神戸大学生30年の語り継ぎ･シンポジウム 「阪神・淡路大震災をどう受け継いできたか」での議論を踏まえて、歴代の神戸大学生に脈々と受け継がれてきた想いと活動を振り返るとともに、これからの活動への期待を込めて意見を交わしました。

30年前に始まった、神戸大学学生震災救援隊、神戸大学総合ボランティアセンターの避難所運営支援、被災住宅の修繕の手伝い、仮設住宅・復興住宅の居住支援、手話通訳、チンドンによる賑わいつくりなどの複数、多重の活動は積極的に地域に出て、地域を知ることで社会のニーズを汲み上げ、今も神戸大学生にボランティア・社会貢献活動に取組むきっかけを提供しています。２つの震災復興公営住宅団地で「神戸喫茶」を隔週で開催し、地域の方同士や学生とのおしゃべりが楽しめる憩いの場として学生にできることを模索しながら継続しています。阪神・淡路大震災の復興祭として始まった「灘チャレンジ」は、学生が地域と共に創り上げる「灘のまちづくりにチャレンジ」で、会場の都賀川に毎年数千人が来場くださるお祭りとなっています。

神戸大学ボランティアバスプロジェクトは、東日本大震災被災地での復興支援経験を踏まえ、２年前から神戸市長田区で災害語り継ぎ活動に取組んでいます。町内会の地蔵盆や餅つきイベント等に参画することで、地域の方々の震災への想いを共有し、1月17日の慰霊祭の運営にも協力しています。令和６年能登半島地震の支援には学生が多様な形でかかわり、Kobe Med Connectのように新たに社会活動に取り組む契機となっています。

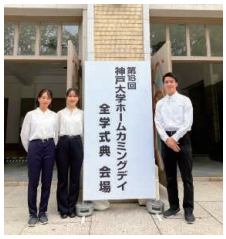
学生たちの想いを実現するため、神戸大学基金が災害ボランティア30年支援事業を継続し、その一環として来年開催の「震災31年ボランティア報告会」での再会を約束して終了しました。

登壇	鈴木 蒼生 代表	神戸大学学生震災救援隊（1995年1月23日設立）
	野々内 日向 代表	神戸大学総合ボランティアセンター（1995年5月10日設立）
	井上 光起 代表	神戸大学ボランティアバスプロジェクト（2011年4月30日設立）
	奥 珠希・島津理沙	Kobe Med Connect（2024年10月25日設立）
コーディネーター	山地久美子	神戸大学地域連携推進本部ボランティア支援部門長・特命准教授

神戸大学生の災害ボランティアが30年の間弛まず継続してきたのは、学生が積極的に地域に出て、皆さまと共に歩んできたからです。学生メンバーは毎年入れ替わりながら、複数の団体が個々に独立性を保ちつつ、多種多様な取組みを相互に連携し、学生に、地域に向けて間口を広げて進化してきたことで30年にわたってバトンが受け継がれてきました。ボランティアに関わるきっかけ、時期、取組みは様々であり、神戸大学はこれからも地域に根付く学生、団体の自立した活動を応援します。

（神戸大学阪神･淡路大震災30年事業委員会　地域連携･ボランティア実行委員会／地域連携推進本部）

第18回「神戸大学ホームカミングデイ」登録ボランティア団体の取組み 10月26日



「能登半島地震災害ボランティア活動」学生報告

全学式典（出光佐三記念六甲台講堂）では、ボランティアに取り組んだ医学部生が現地での活動と学び、被災地に寄せる思いを災害、医療、地域での復興力の重要性観点からまとめ、報告しました。

（Kobe Med Connect　医学部・３回生
奥 珠希・佐藤健夫・島津理沙）

阪神・淡路大震災の語り継ぎ、東日本大震災の文化復興、能登半島地震の災害ボランティア活動について沢山の方が聞きにお越しくださいました。

（神戸大学ボランティアバスプロジェクト）

丹波篠山市西紀地区「にし恋farm」で猛暑の影響を受けながら、大切に大切に育てた黒豆を販売し、見事、完売しました。ご購入に感謝いたします。

（神戸大学地域密着型サークルにしき恋）

学生ボランティア団体の地域活動

①摩耶のんびり自習室

2022年9月から摩耶地域福祉センターにて小学校高学年、中学生、高校生を対象に学習支援ボランティアを行っています。

大学生の活動ではありますが、摩耶ふれまちの皆様、保護者の皆様のご支援のおかげで継続して取り組めています。

また、地域福祉センターで催される“みんなの食堂”や餅つき大会、日本酒勉強会にも参加でき、地域活動の楽しさ、住民皆さまの和気藹々とした雰囲気に触れさせていただいています。（新村康士・代表）

②CNF小児糖尿病サマーキャンプボランティア

医学部のボランティア団体、CNF小児糖尿病サマーキャンプボランティアでは、学生12名が、2024年8月に開催された兵庫県小児糖尿病サマーキャンプにボランティアとして参加しました。本キャンプは、１型糖尿病を持つ小中学生が血糖の自己管理技術を学び、仲間との交流を深めることを目的としています。学生は、イベント企画や生活のサポートを行い、医療スタッフやOBOGと協力しながら活動しました。参加者からは「自分でインスリンを打てるようになった」などの声が寄せられ、大きな成長が見られました。今後もより良いキャンプを目指して取り組んでいきます。

（奥 珠希・副キャンプ長）

摩耶のんびり自習室

兵庫県小児糖尿病サマーキャンプ2024

学生ボランティアサポート助成

団体名	活動内容	事業責任者
灘チャレンジ実行委員会	灘チャレンジ2024	国際人間科学部３年 佐藤 春奈
環境サークルえこふる	「環境かるた」食品ロスver.を用いた 食品ロスに関する小学生への出前授業第二弾	国際人間科学部３年 小城戸 愉子
神戸大学地域密着型サークルにしき恋	農業ボランティア及び黒枝豆生産	農学部２年 枝松 歩紀
兵庫県小児糖尿病サマーキャンプボランティア (CNF)	小児糖尿病サマーキャンプ2024	医学部医学科３年 奥 珠希
神戸大学ボランティアバスプロジェクト	神戸・東北での語り部 および震災ボランティア活動	国際人間科学部４年 井上 光起
神戸大学手話サークルぺんぺん草	学生による手話に関する情報発信・ 手話通訳ボランティア活動	国際人間科学部２年 新谷 勇輝
神戸大学混声合唱団アポロン	合唱文化の普及および演奏を通じた 神戸の地域交流支援活動	法学部４年 志賀 慎之介
神戸大学児童文化研究会	地域と連携して子どもに豊かな経験を 提供する取り組み	国際人間科学部３年 平野 寛大

COC+歴史と文化領域シンポジウム「生活の記憶をつなぐ－地域歴史遺産の記録－」が開かれました

神戸大学は園田学園女子大学と共催で「地域歴史遺産」をキーワードとした歴史・文化シンポジウムを2016年度以来毎年開催しています。これはCOC+（文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」）の「歴史と文化領域」の研究成果発表の場にもなっています。

2019年に文化財保護法が改正され、「未指定を含めた文化財をまちづくりに活かしつつ、 地域社会総がかりで、 その継承に取組んでいくこと」が必要とされていますが、現実には人口減少や少子高齢化が進むなかで、地域のコミュニティ自体が衰退し、文化遺産を維持することが困難な状況が続いています。「村じまい」や「村おさめ」と呼ばれる、歴史を刻んだ地域が跡形もなく消えてしまう事象が現実化する中で、やがて消滅する可能性のある「営みの記憶」を記録に残し、アーカイブ化することの重要性が提起されています。

よって今年度は、2025年2月8日、尼崎市の園田学園女子大学で「生活の記憶をつなぐ－地域歴史遺産の記録」と題したシンポジウムを開催することとなりました。

奥村弘・神戸大学理事・副学長の挨拶、大江篤・園田学園女子大学学長による趣旨説明の後、兵庫県下で地域歴史遺産の保全と活用を行っている神戸大学大学院人文学研究科特命講師の井上舞氏が、「『村の記憶』を『地域の歴史』」へ－兵庫県朝来市の活動事例から－」と題し、過疎地域・ダム移転地域における住民と連携した資料調査・歴史展示など活動報告を行いました。

続いて、過疎地域の生活の知識継承に基づくデジタル・アーカイブの構築に取り組んでこられた兵庫県立芸術観光専門職大学准教授の藤本悠氏から「地域資源のアーカイブと利活用に向けた取り組みについて」と題し、アーカイブ化プロセス内で地域の価値創造について報告がありました。

約２０人が参加し、ディスカッションでは地域歴史遺産の記録化について、多様な関係者が関与するための文化財保存の在り方や、デジタルアーカイブ・生成AIを活用したストーリー化などの観点から熱心な議論が交わされました。

（地域連携推進本部）

活動報告（令和6年10月～令和7年3月）

	毎月	第1･3木曜	大学	地域連携推進本部定例会議
令和6年	10月	3日	大学	地域社会形成基礎論（第3Q）開講（オンデマンド型）
		7日	大学	ひょうご神戸学（第3Q）開講（オンデマンド型）
		12日	大学	阪神･淡路大震災30年「神戸大学生の語り継ぎ」開催
		16日	大学	ボランティアと社会貢献活動（A）（第3Q）開講
		26日	大学	神戸大学ホームカミングディ 登録ボランティア団体の報告･出展
		26日	大学	ALL HAT2024 第9 回HAT 神戸防災訓練･出展
		31日	大学･人文	神戸大学×加西市包括連携に基づく文化財保存及び活用に関する協議会
		31日	大学	令和6年度三田市大学等連携事務連絡会
	11月	16日	大学	神戸大学×ふたば学舎 阪神･淡路大震災30年「記憶を受け継ぐ大学生の取り組み」開催
	12月	1日	法学	「竹林伐採体験ツアー～竹を身近にしよう～」開催
		2日	大学	神戸新聞社主催の学長と市長の新春座談会「次世代の姫路、魅力創生について」
		4日	大学	ボランティアと社会貢献活動（B）（第3Q）開講
		6日	大学	奥村理事･灘区長意見交換会
		15日	大学	第2回 地域防災セミナー「阪神･淡路大震災から30年 次に私たちができること」開催
		22日	人文	第23回 歴史文化をめぐる地域連携協議会
令和7年	1月	11日	大学	「阪神･淡路大震災30年シンポジウム」開催 （神戸大学阪神･淡路大震災30年事業委員会、都市安全研究センター、地域連携推進本部）
		17日	大学	園田学園女子大学×神戸大学　歴史･文化シンポジウム 「生活の記憶をつなぐ－地域歴史遺産の記録－」開催
		22日	大学	令和6年度丹波篠山市･神戸大学連携推進協議会
	2月	15日	保健	保健学研究科 地域連携センター報告会
		22日	大学	丹波篠山研究発表会
		26日	大学	第3回 地域防災セミナー「みんなの避難の場～多様性と包摂性を考える～」開催
	3月	11日	大学	地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットォーム（COC+）連絡会
		17日	大学	姫路市と包括連携協定締結
		27日	大学	姫路市大学発まちづくり研究助成事業成果報告会